令和元年度「全国高校生体験活動顕彰制度」事業報告書

地元ってスゴい！

高校生が“本気”で考えた『この町のために』

この町のために
自分ができることは？

プレゼン力向上。

発表する力がついたと思う。

成果として、生徒の多くがアンケートに書いていたのが、「人前での発表に慣れた」「発表であまり緊張しなくなった」というものでした。当初は、発表することに苦手意識を持っていた生徒が少なくなかったのですが、約半年間の探求の時間の学習の中で、伝えたいことを相手に伝えるためのポイントを意識して発表する経験を積み重ね、少しづつプレゼンテーションの力を高めていきました。

このホウレンソウ うまい…

地元の魅力再発見。

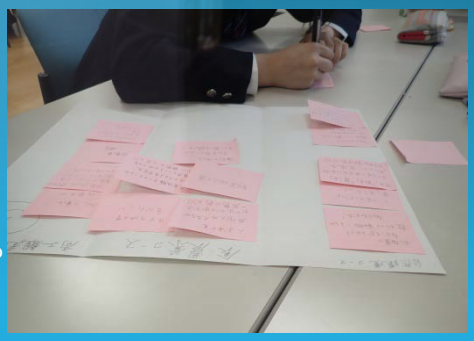
フィールドワークで、農家を訪れた生徒たちは、新鮮な野菜の歯ごたえと味に驚いたと言います。

他のグループでは、協力者の案内で、畑の下の地層の中に見える100年前の火山活動の痕跡を見たり、アップダウンの続く地形をサイクリングで回ったり、軽登山をしたりと、地元の魅力を再発見した高校生たちは、自分たちも気づいていなかった地元の魅力を、他の人たちにも伝えたいという気持ちが湧いてきました。

話し合いって楽しい。

仲間との対話。

自分の考えを、まずは同じグループの中で伝え合い、共感したり、違う考え方をした理由に耳を傾けたりすることを繰り返しました。初めの頃は、付箋に単語を書くことさえ悩んでいた生徒もいましたが、出てきた言葉に対して自由に話をしていくうち、「友達と話し合うのが楽しくなった！」と話すようになった生徒もいました。言葉遣い、説明の仕方も一緒に学んできました。



高校生が地元のことをこんなに…！

町民との対話。

町の将来について、高校生29名、町民61名が、各テーブルに分かれて、語り合いました。この前、高校生はグループごとにステージに上がり、自分たちが町のために考えて実践してきたことを、町民の前で発表しました。高校生たちが、町のことを考えて懸命に話す様子を、町民もまた真剣に聞きながら、「地元の高校生が、地元のことをこんなに一生懸命に考えていて、とてもうれしい」と話す町民もいました。

農家を応援したい。

地元野菜をPRするポスター。スマホ画面を使い、おいしい野菜の話題性をアピールする。【食・農業グループ】

新たな魅力を発信したい。

八景はどうやってできた？

1999年に上富良野町民によって選定された。
当時、別の地域でも八景というPRを行なっていたので、それを上富良野も取り入れたと言われている。
目的は十勝岳がより美しく見える場所をつかって、上富良野町をPRすること。
八景に関わるスタンプラリーやイベントもある。

景勝地の魅力を観光客にアピールする冊子。一般的な観光パンフレットと違い、この景色の中に実はこんな野生動物が暮らしているという視点を入れているところがポイント。

【自然・環境グループ】

「体験活動をとおした青少年の自立を目指して」

～全国高校生体験活動顕彰制度（探究アワード）の取組～

国立大雪青少年交流の家
是安 聰一郎・佐藤 麻友美

１．はじめに

現在、大雪青少年交流の家では多くの学校宿泊研修を受け入れているが、高等学校の利用に限って見た場合、年間で約 30 校ほどの利用がある。ほとんどの高等学校が、卒業後の進路を見越した高校生活 3 年間についてのガイダンスや講話等の実施、学級や学年の仲間関係づくりといった活動を目的としている場合が多く、企画指導専門職である我々は、仲間づくりのための「コミュニケーショントレーニング」をプログラムとして提供したり、「登山」の引率補助をしたりすることで、学校の教育活動をサポートする場面が多かった。

今年度、施設からの高等学校への新たな学習支援・連携として、「総合的な探求の時間」の学習支援に乗り出すことになった経緯と、取組の成果や課題について報告する。

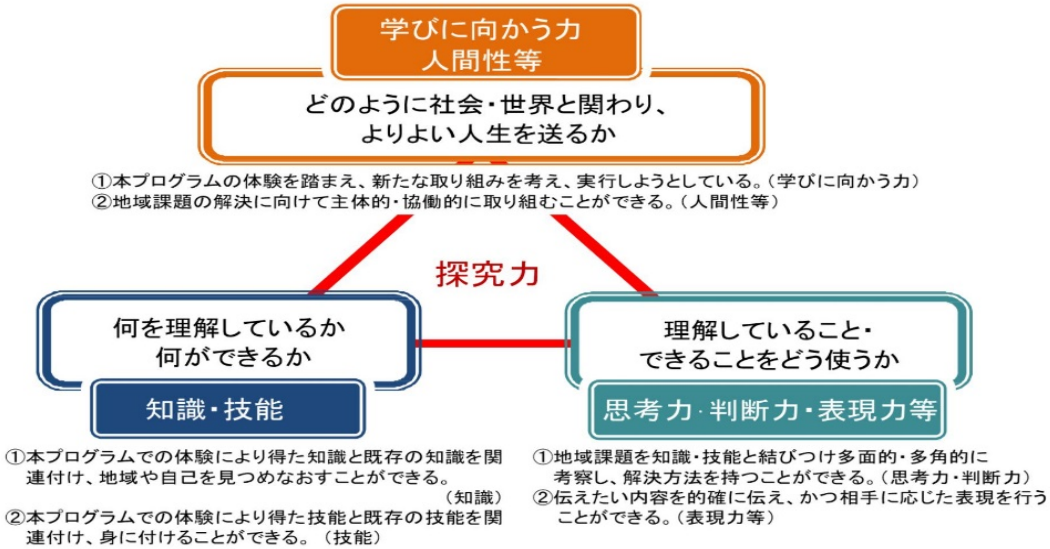
２．「全国高校生体験活動顕彰制度」試行実施の経緯

国立青少年教育振興機構が、令和 2 年度から全国の施設において、新規事業として「全国高校生体験活動顕彰制度」を実施するにあたり、令和元年度は大雪青少年交流の家と、妙高青少年自然の家（新潟）の 2 施設において、本事業を先行実施し、制度の仕組みや成果を検証し、全施設が円滑に事業を行うためのモデルとすることになった。

交流の家における本事業の参加者については、隣町にある上富良野高等学校に協力を依頼し、同校の３年生（29 名）を対象に、事業を実施することとなった。

３．制度創設のねらいと概要

◆各地方施設では、宿泊を伴う合宿を通して、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力などを養成。



◆多様な人々と協働しながら地域にある課題解決に向けた取組を行う。

→地域や自然環境に愛着を持ち、新たな価値を創造する高校生を育成。

◆本顕彰制度においては、実践活動を修了した者には修了証を配付。

◆表彰制度を設け、体験活動を積極的に行った高校生を学校や社会がしっかりと評価するよう、その機運を高めていく。

※下線は「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」

平成 25 年 1 月 21 日　中央教育審議会

4．制度創設の背景

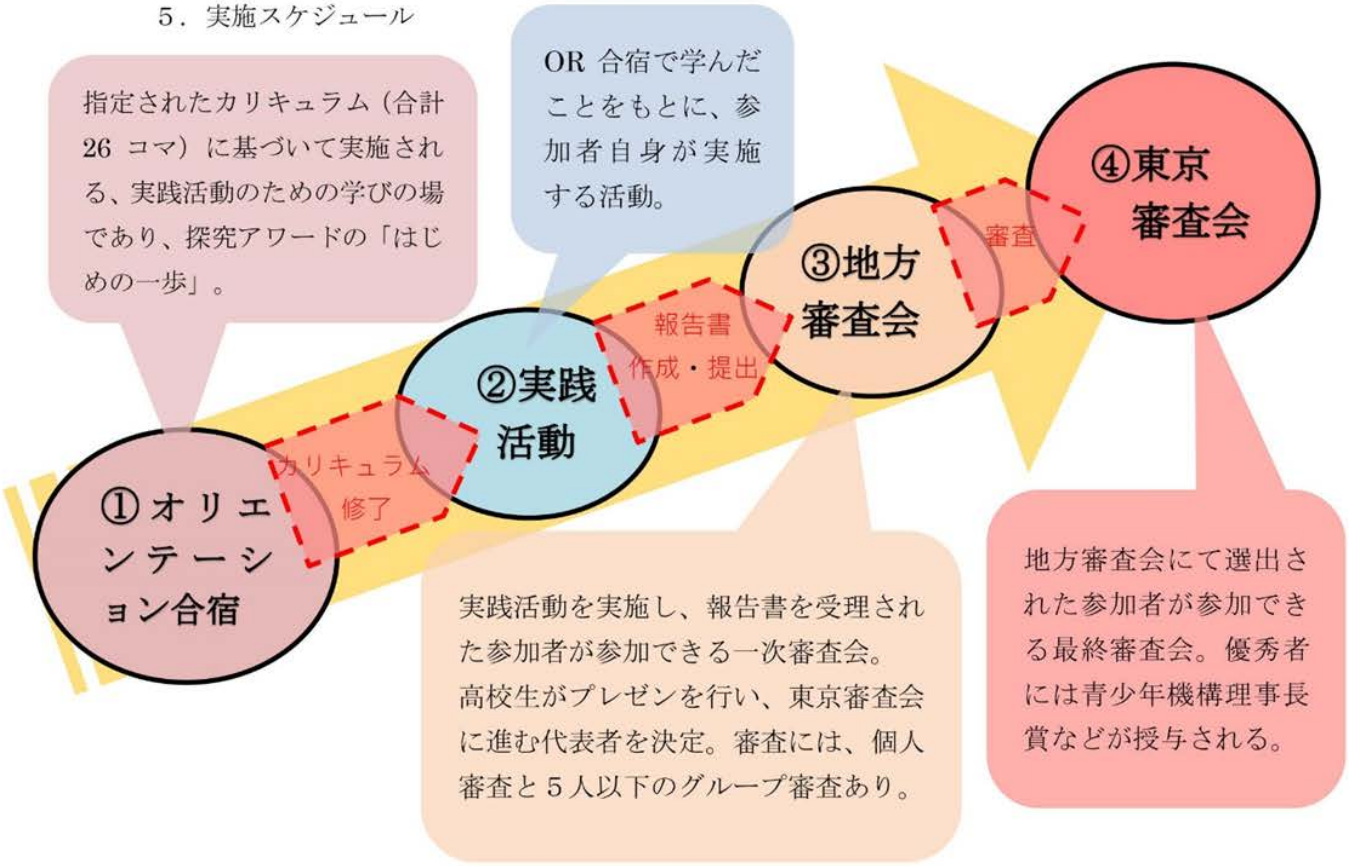
○国立青少年教育振興機構の有する全国 28 の教育施設のうち、地方 27 施設は、都市部から離れた位置に所在している。

○当該地域を含む日本の地方地域は、少子化による人口減少や青少年の進学・就職による人口流出が課題となっているところも多い。

○本事業に参加する高校生には、地域的な諸問題を発見・解決しようと活動する中で、地域の魅力や課題の発見を通して郷土理解を深め、卒業後に進学・就職等で都市部に移り住んだとしても、郷土への関心を高く持ち続ける人材を育成し、地域創生活動の種を植えていきたい。

○各地方施設は、自然体験・社会体験・青少年の課題に対応した事業を提供しており、また、研修場所・宿泊場所・指導者の全てを有することから、青少年体験活動顕彰制度の創設・実施するのに、最適な場所であると考えられる。

5．実施スケジュール



6．事業の実際

① オリエンテーション合宿（6月13日～14日）

協力者として、地元の温泉経営者、農家、サイクルガイド、役場職員に学校へ来ていただき、事前ガイダンスを受け、宿泊研修では、4つのコース【食・農業コース】、【商工・観光コース】、【自然・環境コース】、【歴史・文化コース】に分かれて、フィールドワークを行った。地元の魅力について、協力者から教えていただき、地域課題を考える準備をした。

② 実践活動（7月4日～11月中旬）

6つのグループの中で、生徒がそれぞれ、地域のためにできることを話し合い、解決のための実践活動として、農作業を手伝ったり、観光客にインタビューをしたりする取材活動を行った。

その後、一連の探究活動によって、どのような成果や思いに至ったのかなどを、個人で実践報告書にまとめた。

【各グループの実践活動内容】

○観光客に登山道のガイドマップを作って配付。
○観光客に名所のガイドマップを作って配付。
○野菜のＰＲポスターを作ってスーパーに掲示。
○野菜ＰＲパンフを作って、駅などで配付。
○観光客からのインタビューをもとに、町づくりのアイデアを町長に提案。
○観光客だけでなく、地域住民にも過去の自然災害の様子や名残を知ってもらうためのパンフレット作り。

③ 地方審査会（12月12日）

グループごとに、プレゼンテーション発表（7分）と、審査委員との質疑応答（8分）を行い、発表内容がしっかり伝わるようにするための工夫や効果的な方法について、審査委員から指導・助言を受けた。審査の結果、北海道代表として全国審査会に出場する1グループを決定。

④ 全国審査会（1月12日）

審査の結果、上富良野高等学校の「食・農業グループ」が「審査委員長賞」を受賞。

【生徒、協力者、教員の感想】

・地域の知らないことがたくさん知れたので、もっと色々知りたいと思った。（生徒）
・今後も続けてやって頂ければと思う。目的や進め方などを、もっと事前にしっかり行いたかった。（生徒）
・地元の高校生が、地元のことをこんなに一生懸命に考えていて、うれしい。（町民）
・高校生が町の魅力を外部に発信したり、町づくりに意見を出したりすることは、町の魅力を高める。（町民）
・高校生に対して、このように地域の魅力を知る機会を設けることは、とても大事なことである。（協力者）
・生徒はラベルワークなど、これまであまり取り組んでいない方法で、仲間と自由に話し合える様子が楽しそうだった。（教員）
・何度も発表の場面を経験することで、生徒の多くが人前で発表することに慣れ、成長を感じた。（教員）

７．成果と課題

・新しい学習指導要領に盛り込まれた観点である「主体的・対話的で深い学び」について、施設が学校と連携して、学習活動の支援・協力を行うことができた。
・高校生が地域の人々と関わりながら、地域の特色や良さ、課題に目を向け、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力を、個々に高めていた。
・事前に、外部の協力者や支援者との調整、校外学習での引率や指導の体制への協力を積極的に行った。
・充実した学習活動を進めるために、学校側と打ち合わせを頻繁に行ったが、学校側からは効率的に行うために、スカイプ等を活用した打ち合わせ方法の提案があった。
・学校の協力を得ながら、顕彰制度のカリキュラムを進めてきたが、授業時数や打ち合わせの回数を相当に要したので、今後はより効率的な進め方を目指して実施していきたい。
・発表や成果物の出来栄えよりも、成長の度合いの大きさを評価できるように、活動ごとに、思いや考えがどのように変わっていたかの記録を残していくことが必要である。

８．終わりに

高校と協議を重ねながら、約半年間に渡って、高校生の学習を支援してきた。高校生の学習活動に、施設職員としてこれだけ深く関わったのは初めてであったが、この半年間の高校生の成長ぶりに驚かされた。例えば、農家に取材を申し込むための電話では、緊張から手が震えて、しっかりと用件を伝えられなかった男子高校生が、地方審査会で堂々と発表していた。地方審査会の直前に行われた「町民との対話集会」では、どのテーブルでも、高校生と町民が、町の魅力や将来について熱く語り合っており、学習を始めた頃の受け身なイメージが強かった高校生たちの印象からは、想像ができないほどの成長を感じた。

今回の探求活動の学習支援をとおして、高校生が社会に真剣に向き合い、自分や地域の将来のために具体の行動を起こしたことで、彼らが持続可能な社会への力強い一歩を踏み出したに違いないと確信している。

本事業に御協力いただいた方々　※五十音順

青野　範子 氏（十勝岳温泉株式会社湯本凌雲閣）
齋藤　慎吾 氏（株式会社ヤマイチ）
佐川　泰正 氏（上富良野町商工会）
佐藤　雅喜 氏（十勝岳ジオパーク推進協議会事務局）
田中正太郎 氏（ちにた・ふぁ～む）
田中　誠也 氏（十勝岳ジオパーク推進協議会事務局）
長友あゆみ 氏（公益財団法人三浦綾子記念文化財団）
山中　潤一 氏（十勝岳ジオパーク推進協議会事務局）
山本　幹彦 氏（当別エコロジカルコミュニティー）

連携協力
北海道上富良野高等学校
校長　辻　　芳恵　先生
教頭　千葉　哲也　先生
教諭　山田　政明　先生
教諭　研谷　利幸　先生
教諭　藤坂智亜樹　先生

事業担当
国立大雪青少年交流の家
是安聰一郎
佐藤麻友美
安達　義徳
小俣　　太
門前　詩織

独立行政法人　国立青少年教育振興機構
国立大雪青少年交流の家

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です
4 質の高い教育をみんなに
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任 つかう責任